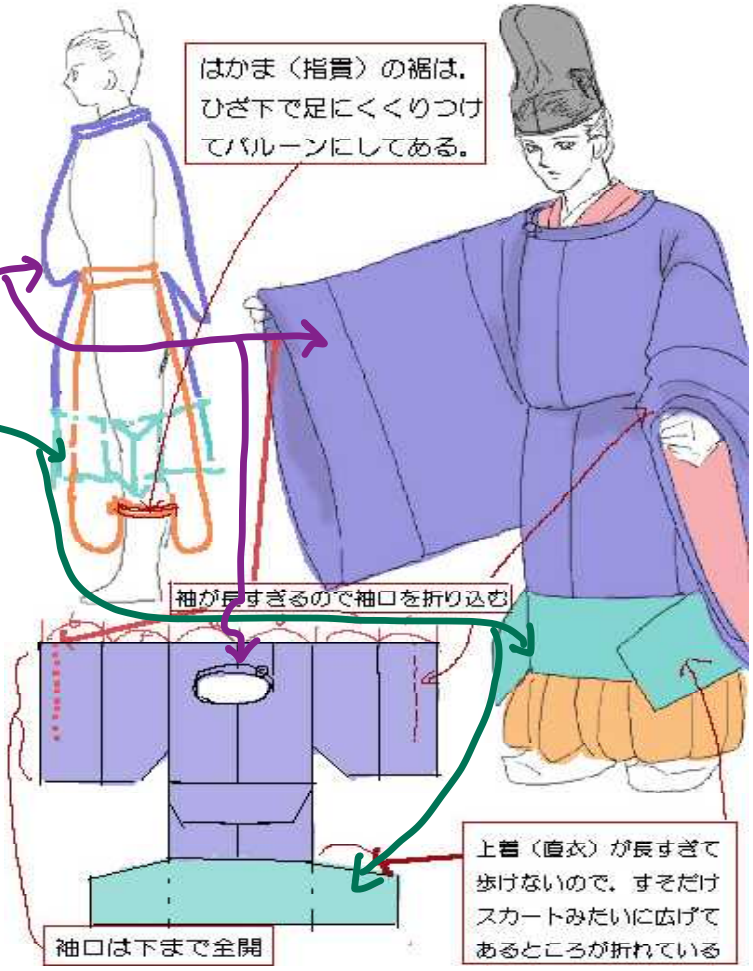
「直衣（のうし）」 ▽

　これは源氏物語とか平安王朝文学に出てくる身分の高い貴族の男性が着る(スーツのような位置づけの、オール絹製の)服装です。

　天皇の前に出るときはこれのさらに高級バージョンの「束帯」を着ないといけない。

　直衣はジャケットのようなもの(上着)、袖口は上から下まで全開。図ではわかりやすくするために《紫》と《緑》で色分けして塗っていますが、実際にはこれ全部が同じ布地です。平安時代には，正式の衣裳は衿が丸いことになっていて、衿には紙でできた固い芯が入っています。《緑》部分は欄(らん)といって歩くときに足が開くようにそこだけスカートみたいに裾広がりにしてあります。立っていると、左右のフレアー部分がぺろんと前に垂れ下がり、菱形になって見えます。また，左上の断面図のように，おなかのあたりは体の前後ともに，たるみを作るようになってます(前側はポケットがわりに物を入れる)。

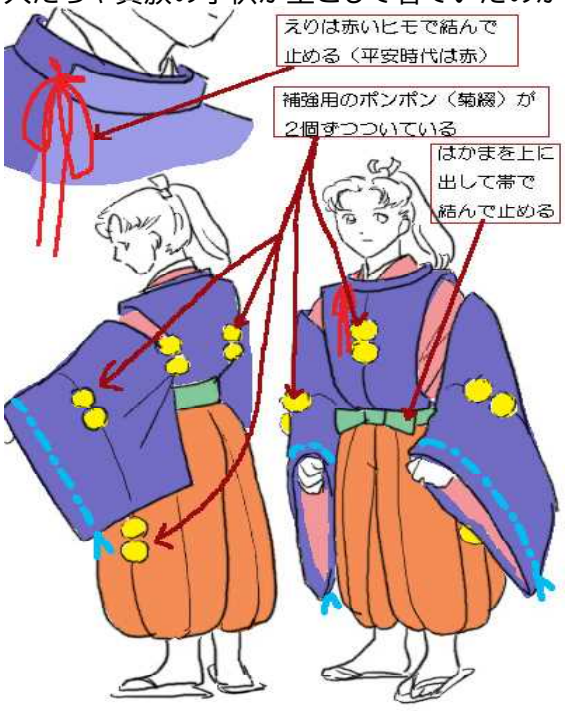


「水干（すいかん）」

　牛若丸(子供・平民)の服装です。低い身分の人たちや貴族の子供が主として着ていたのが水干(すいかん)です。水干とは水で洗って、干してまた着られるという意味。基本は麻製ですが高級品には絹もあります。

　絹の直衣や狩衣は基本的に洗濯不可だったのです(汚れたら、そのまま自分より身分の低い人にあげて自分は新しいの着物を作る)。

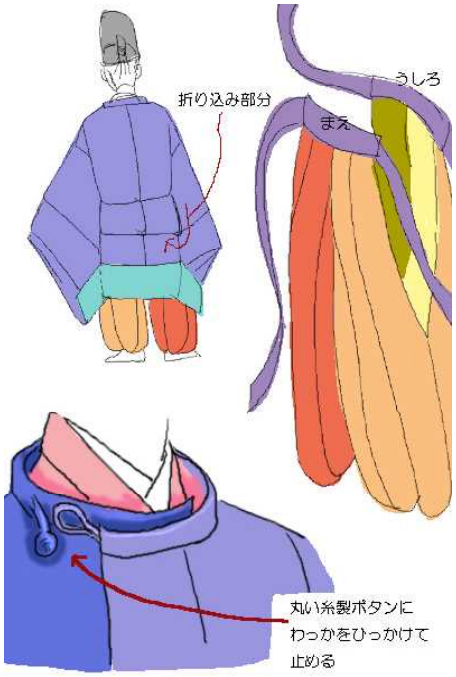
水干(すいかん)の基本的な形は狩衣(かりぎぬ)とほぼ同じです。首の止め方が長い衿(えり)ひもをちょうちょ結びにする。なお平安時代の衿ひもの色は赤色と決まっていました。
　破れやすい場所に補強用の糸をつけ太い組紐のような糸を布に通してヒモの端をほぐしてポンポンみたいにします。菊の花みたいなので「菊綴」(きくとじ)といいます。そでの外側と胴体中央、背中の袖と胴体の接着部分、はかまの外側に，それぞれ2個ずつセットにしてつけます。
　はかまを上に出して、上着を中に入れて着ます。子供がパジャマを着る時に上着を中に入れるような感じです。帯はハカマとは違う色が多く、白色が多かったようです。

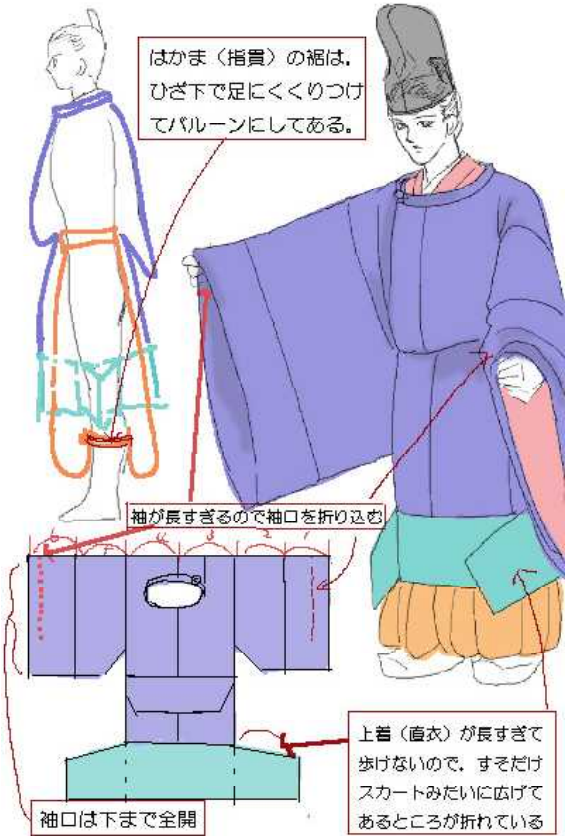


「指貫(さしぬき)」

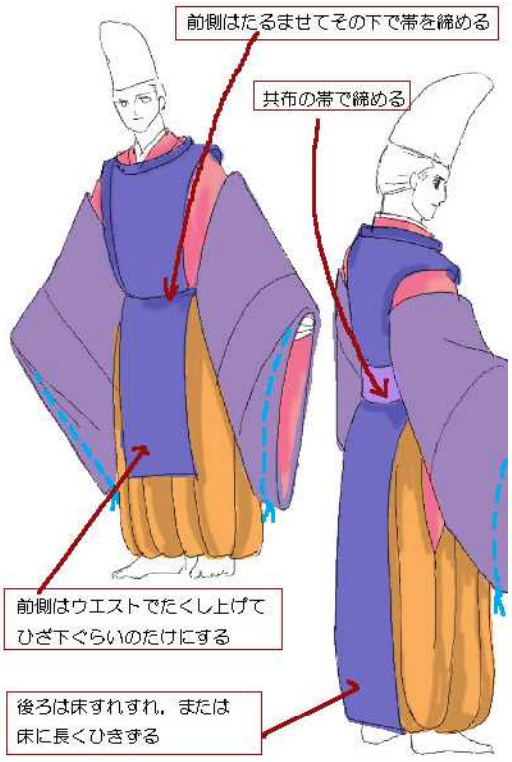
　かぼちゃというかバルーンスカートみたいな袴を単(ひとえ)の上からはきます。
　どうやったらバルーンになるかというと右図の断面図のように膝下ではかまのすそをしばりつけておいてそれから袴をはくとすそがふんわりと輪になるんです。

　長さが短く、着たときにふくらはぎから下が出るくらいの短いものを「葛袴(くずばかま)」といいます。もっと貧乏だと、最初から足首のところで切ってあって、すそがバルーンにならない簡単な切袴(きりばかま)＝現代のハカマみたいなものをはきました。





「狩衣（かりぎぬ）」

　直衣は布地が多く重くて非活動的なので貴族が狩りに行くときなどのために気軽なスポーツウエア兼ホームウエアとして開発されたのが「狩衣」です。身分があまり高くない陰陽師などは直衣を着ることができないので基本的には狩衣姿です。

　貴族や陰陽師の狩衣は絹製ですが召使いなどは麻製のこともありました。現代では神社の神主さんの多くがこれを着ています。